

米国州立大学に通うソーシャルワーク学部生の共感性(Dispositional Empathy)に関する一考察
—ソーシャルワーク学部所属が共感性に与える影響—

○ポストドク研究者 佐藤 亜樹 (002622)

共感性、所属学部、ソーシャルワーク教育

1. 研究目的

目的：この発表では、ソーシャルワーク学部専攻の学生とそれ以外の学部生の間での共感性(dispositional empathy)の差異について、また、ソーシャルワーク学部在籍(教育)が学生の共感性に与える影響について、米国中西部の州立大学の大学生を対象とした調査結果が報告される。

背景：効果的なソーシャルワーク実践のためには、援助者が十分な共感性を持つことが要求される(Gerdes & Segal, 2011)。問題を持つ人々を援助するソーシャルワーク専門職にとって、目の前にいるクライアントの立場を理解し、共感的態度で関わることは、援助される側の抵抗を軽減し、問題解決のための情報の開示を促す(Forrester, Kershaw, Moss, & Hughes, 2008; Forester, McCambridge, Waissbein, & Rollnick, 2008)。しかしながら、ソーシャルワーク学部を専攻した学生の共感性が他学部専攻の学生とどのように異なるのか、またそれらの共感性がソーシャルワーク学部に所属すること(教育)によってどのように変化するかについての実証研究は少ない。

2. 研究の視点および方法

調査疑問・仮説：(a) ソーシャルワーク学部を選択した学生とそれ以外の学部を選択した学生との間で共感性に差異がある、及び、(b) ソーシャルワーク学部に所属すること(ソーシャルワーク教育)は学生の共感性に変化を与える、という二つの仮説が検証された。

調査対象：調査標本は、米国中西部の州立大学に在籍する 460 人の学部生である。内、女性 227 人(49.8%)、白人 383 人(84.0%)、平均年齢 19.7 歳、キリスト教信者は 307 人(69.5%)であった。所属学部の内訳は、ソーシャルワーク 44 人(9.8%)、ビジネス 103 人(22.9%)、教育 71 人(15.8%)、心理 63 人(14.0%)、その他 169 人(37.6%)であった。

調査手順：調査内容及び手順の説明は、各学部の教職員を経由した E メールもしくは口頭で行われた。被験者は、SurveyMonkey のアドレスにアクセスし、質問紙調査に回答した。

測定用具：共感能力を測る尺度：共感性の測定尺度として 28 項目からなる Davis (1983) の「対人的反応性指標 [Interpersonal Reactivity Index (IRI)] が使われた。この尺度は、共感性の情動的及び認知的側面を多元的に測定するために開発され、「空想(Fantasy)」、「共感的懸念(Empathic Concern)」、「個人的苦悩(Personal Distress)」、「視点取得(Perspective taking)」の四つの下位尺度で構成されている。本研究では、共感性測定のために 7 点リッカート法を採用した。本研究での尺度の内の一貫性信頼係数(Cronbach Alphas) は、空想= 0.71、共感的懸念= 0.78、個人的苦悩= 0.72、視点取得= 0.77 であった。

3. 倫理的配慮

本研究は、発表者が当時所属していた大学の「人間及び動物を被験者とする調査研究に対する機関審査委員会 (Institutional Review Board: IRB)」によってデータ収集の承認を得たものであり、(a) 参加は自発的なものであること、(b) 回答者の身元特定につながる手順は含まれないことが調査内容及び手順の説明の中で強調された。

4. 研究結果

学部間の共感性の比較：IRI 尺度を使用した研究では、往々にして男女間の共感性に統計学的な有意差が認められる(Hall, Davis & Connelly, 2000)。また、本研究の調査標本を確認した際、

学部間での平均年齢に有意差が認められた。従って、「性別」を独立変数として、「年齢」を共変量(covariate)として付け加えた分析(二元配置分散分析: Two-Way ANOVA with Covariate)が行われた。つまり、IRIの下位尺度である「空想」、「共感的懸念」、「個人的苦悩」、「視点取得」の平均得点を「学部」間(ソーシャルワーク、心理、教育、ビジネス、その他)で比較するための分析を、「性別」と「年齢」を加えて実施した。その結果、「空想」($F(4, 439)=2.74, p=0.03$)と「視点取得」($F(4, 439)=2.67, p=0.03$)において、「学部」の主効果が認められた。また、全てのIRI下位尺度の平均得点において「性別」の主効果が認められたが、「学部」と「性別」との交互作用効果には有意差は検出されなかった。また「年齢」の主効果は、「個人的苦悩」においてのみ、認められた。Bonferroni法による多重比較の結果は、「空想」尺度において心理学部の得点が教育学部の得点よりも有意に高く($p=0.02$)、「視点取得」尺度では、ソーシャルワーク学部の得点が教育学部の得点よりも有意に高かった($p=0.02$)。

共感性へのソーシャルワーク学部所属(教育)の効果: ソーシャルワーク学部所属(ソーシャルワーク教育)が共感性に与える影響を調べるために、被験者の「年齢」を教育に代わる変数として使用した。この分析では、ソーシャルワーク学部にも所属する学生のみ($n=44$)を抽出し、「21歳未満群($n=7$)」と「21歳以上群($n=31$)」¹⁾に分け、共感性の下位尺度の平均得点について独立した t 検定を行った。21歳未満群には、男性がいなかったため、21歳以上群の男性($n=6$)はこの分析から排除された。二群間の人種及び信教の構成比率に有意差はなかった。結果、IRI共感性のすべての下位尺度において、二群間での平均得点に有意差は認められなかった。「空想」 $t(36)=-0.15, p=0.89$;「共感的懸念」 $t(36)=-1.27, p=0.21$;「個人的苦悩」 $t(36)=0.86, p=0.40$;「視点取得」 $t(36)=0.39, p=0.70$ 。

考察: この調査結果が示しているのは、(a) ソーシャルワーク学部を専攻した学生は、教育学部の学生に比べて、日常生活の中で他人の立場に立って考えようとする(=「視点取得」)傾向が強いこと、(b) ソーシャルワーク教育は共感性の発展には影響を及ぼさないこと、また、(c) 性別(女性であること)が共感性に与える影響が大きいこと、である。ただ、本研究は探索的なものであり、二次的データを利用して行われたため、標本サイズ、各学部内での主たる専攻分野の確認、ソーシャルワーク教育の概念化妥当性、及び社会的望ましさの統制等に問題が生じた。将来的には、ソーシャルワーク学部における学年、ソーシャルワーク学部内での主たる専攻分野・実習先などを、ソーシャルワーク教育を表す変数として、共感性との関係进行分析する必要がある。また、その際、ソーシャルワーク教育が学生の共感性の表出にどのように影響を及ぼすのか、行動レベルで測定することも求められるであろう。

注 意

1) 通常、ソーシャルワーク実習は4年次(senior)に行われるため、この分析では、21歳をグループ分けの指標として用いた。

参 考 文 献

Forrester, D., Kershaw, S., Moss, H., & Hughes, L. (2008). Communication skills in child protection: How do social workers talk to parents? *Child and Family Social Work, 13*, 41-51. doi:10.1111/j.1365-2206.2007.00513.x

Forrester, D., McCambridge, J., Waissbein, C. & Rollnick, S. (2008). How do child and family social workers talk to parents about child welfare concerns. *Child Abuse Review, 17*, 23-35. doi:10.1002/car.981

Gerdes, K. E., & Segal, E. A. (2011). Importance of empathy for social work practice: Integrating new science. *Social Work, 56*(2), 142-148. doi:10.1093/sw/56.2.141

Hall, J. A., Davis, M. H., & Connelly, M. (2000). Dispositional empathy in scientist and practitioner psychologists: Group differences and relationship to self-reported professional effectiveness. *Psychotherapy, 37*(1), 45-56.